

そえざわ

添沢遺跡(本発掘調査A・B)

所在地 北設楽郡設楽町田口字添沢
(北緯35度06分22秒 東経137度34分23秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和2年6月～令和2年11月

調査面積 1,769㎡

担当者 鈴木正貴・河嶋優輝・宮腰健司



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、令和2年6月から10月に実施した。調査面積は本発掘調査Aが14㎡、本発掘調査Bが1,755㎡である。平成27年度に実施した範囲確認調査では、明確な遺構は検出されなかったものの、山茶碗および須恵器が出土している。今年度の本発掘調査Aの調査対象範囲は平成27年度の調査範囲の東側および北側の2箇所に分割されているため、それぞれ1箇所のトレンチを設定した。設定したトレンチはどちらも、国道257号と高さを揃えて造成された盛土から小松川方向へと下る斜面部にあたる。また、本発掘調査Bの調査対象範囲は添沢川を挟んで南北に分割されており、北を20A区、南を20B区とし、更に作業工程上、20A区を20Aa区、Ab区、Ac区に3分割して調査を実施した。

立地と環境 遺跡は設楽町田口地区、国道257号の南西側に所在し、添沢温泉の所在した北西の谷から南西へ流れる添沢川と、南東から北西へ流れる小松川が合流する地点の南北に展開する河岸段丘上に位置する。現地は西に向かって尾根状に突出した地点に当たり、この尾根状地形全体が棚田として造成されている。現地表面の標高は、20A区付近では403.5m～407.9m、20B区付近では400.2m～405.2mである。

調査の概要 調査区全体に人為的な地形の改変が及んでおり、一部では岩盤や基盤層まで掘り込んで水田のための平坦面を造成している。そのため、調査範囲の大部分で明瞭な包含層が確認できなかった。検出された遺構は用途不明の土坑がほとんどであり、竪穴建物、掘立柱建物、井戸等の存在は想定できない。

遺物は縄文時代早期に遡る土器から山茶碗等の中世遺物までが出土しており、近世以後の遺物はほぼ見られない。遺物の出土状況としては自然の谷地形の埋土中であるか、遺構内ではなく検出面(基盤層直上)からの出土がほとんどであり、二次堆積によるものと考えられるものが多い。

本発掘調査Aの結果 本発掘調査Aは20Ab区の北にTT01、20B区の南東にTT02を設定して実施した。基本的な層序は、地表面下ににぶい黄褐色～暗褐色の中・細粒砂質シルトの盛土層が存在し、黒褐色～褐灰色シルトの層を経て、褐色の極細・中粒砂質シルトあるいは角礫を含む褐色シルトの基盤層に至るというものである。TT01の基盤層は河川堆積である可能性が考えられる。

TT01の土層断面の観察からは、20Ab区からAc区にかけて検出された谷地形400NRがAb区北方にも延びていることが推定されるが、400NR埋土の中でも遺物を多く含むと想定される層はこの地点には存在しないか、既に削平されている。また、今年度の本発掘調査Aによる検出遺構・出土遺物はない。



調査区配置図 (S=1/600)

2 0 A 区 調査着手前の20A区は、国道南側に盛土によって造成された平場から下った地点に位置し、3箇所の平坦面によって構成された北から左へ下る斜面地である。調査区の3区分は着手前の平坦面の区分にほぼ相当する。

調査の結果、20A区全体に渡り、主に削平によって水田のための平坦面を造成していることが判明した。削平は大部分において基盤層まで及んでおり、Aa区北半部で検出された浅い谷地形と谷地形400NRを除けば、遺物包含層は遺存しない。また、Aa区の谷地形と400NRは位置関係上同一のものである可能性がある。検出された遺構には直径30～50cmの土坑が多く、1箇所のみ柱痕跡が確認できた遺構が存在するが、それに対応するような柱穴はなく、建物などの存在は想定できない。

400NR外からの出土遺物としては石器、土器、陶磁器がある。石器には剥片、摺石・敲石、石鏃がある。土器は、楕円文の押型文土器、繊維土器、条痕文土器などの縄文土器が出土している。陶磁器は山茶碗のほか、蓮華文のある青磁碗の胴部が1点出土している。遺物は細片化したものが多く、現地点での利用・廃棄を想定できるような状況ではない。

4 0 0 N R 400NRは20Ab区からAc区にかけて検出された自然の谷地形であり、確認できた最大幅は約15m、周辺の基盤層からの最大深さは2m程度で、Ab区北方とAc区西方に延びるものと推測される。400NRの埋土は3層に分かれ、第2層および第3層はTT01やAc区西壁において対応する土層が確認されている。最も多く遺物が出土したのが第1層であるが、この層はAb区西部にしか遺存しない。

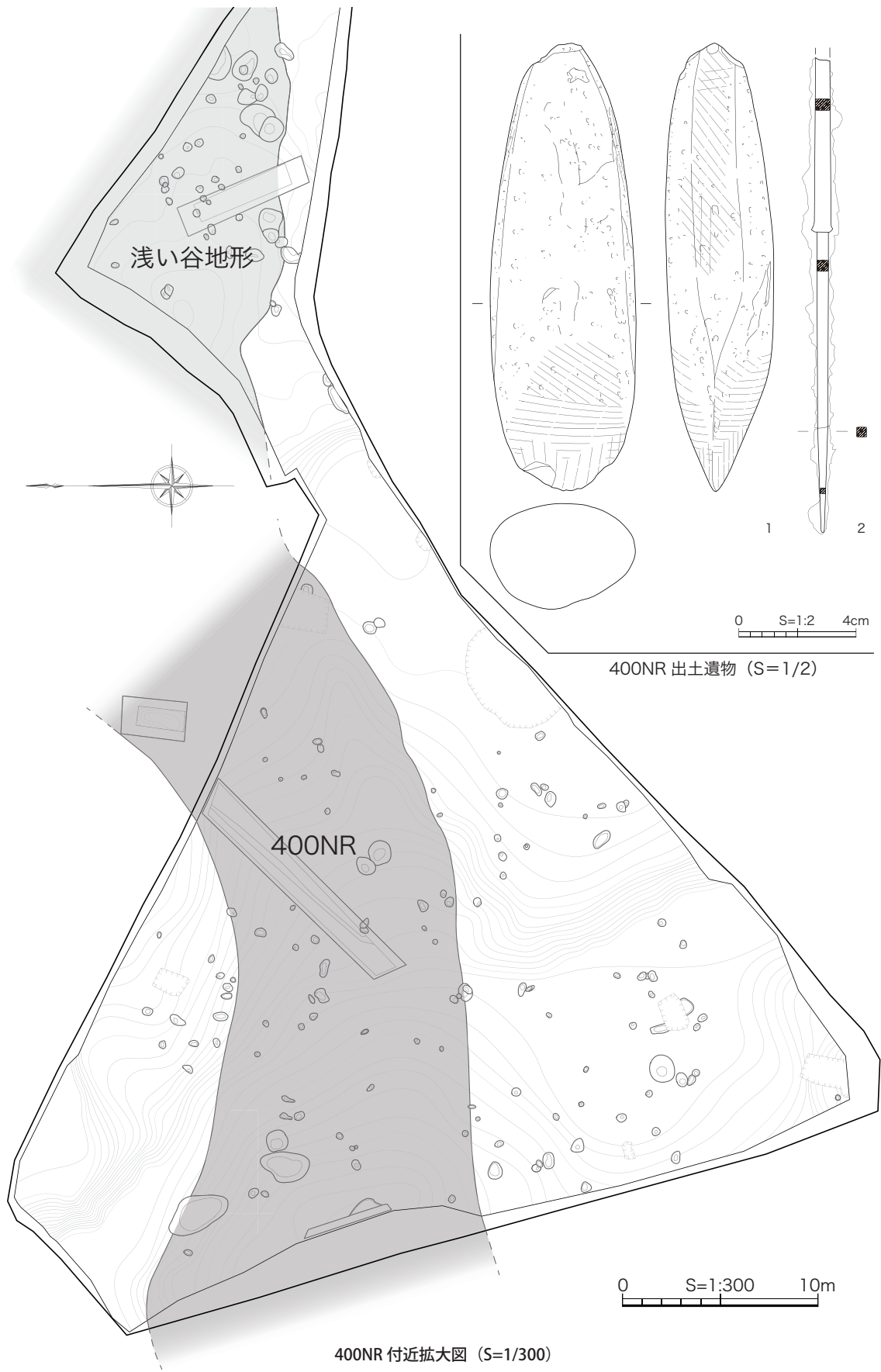
400NRからの出土遺物は石器、土器、陶磁器、鉄滓、鞆羽口、鉄器である。石器は剥片、摺石・敲石、削器およびほぼ完形の塩基性岩製磨製石斧(右図1)がある。土器は、楕円文の押型文土器や条痕文土器などの縄文土器が出土している。陶磁器は古瀬戸の瓶子1点、青磁2点のほか、渥美・湖西窯系および東濃系の山茶碗が同程度の割合で出土している。鉄滓は十数点が出土し、直径は最大で7cm程度である。鞆羽口は1点のみ出土し、鉄滓の付着が見られる。鉄器(右図2)は鉄鏃と推定される。錆に覆われて関部は明瞭でないが、X線写真を元に本来の形状を推定した。茎部の断面形状はほぼ正方形で、頸部では若干扁平に近くなる。

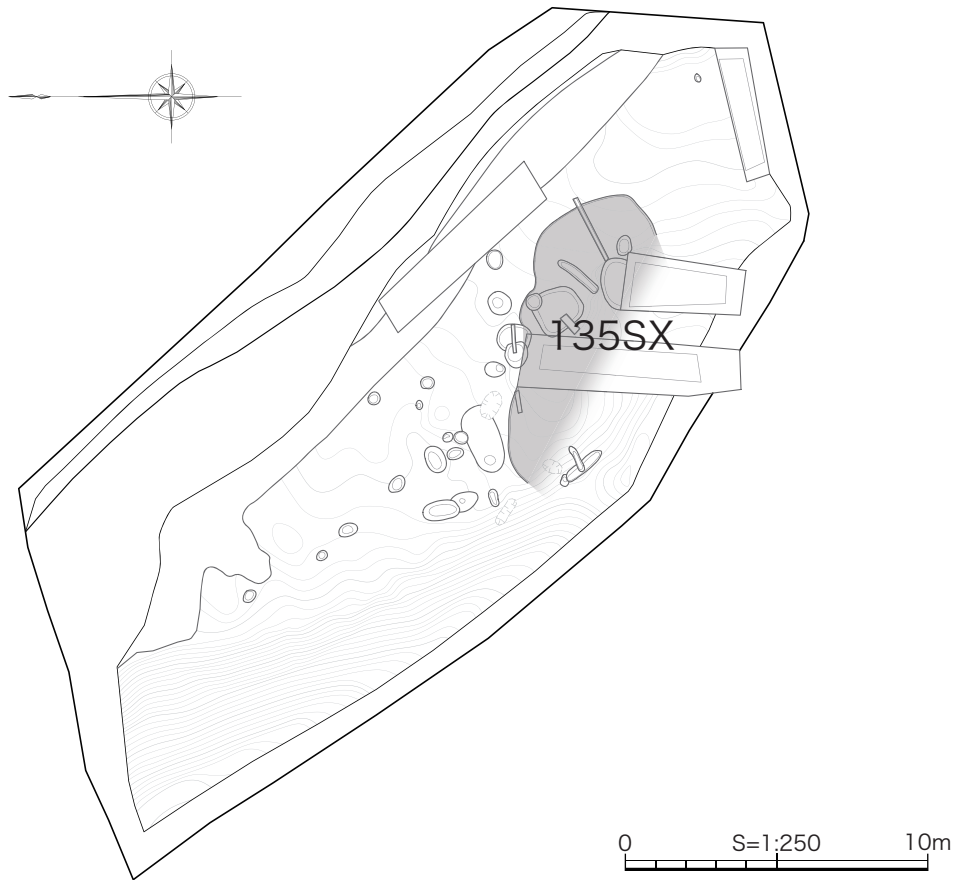
2 0 B 区 調査着手前の20B区の地形は、調査区内の東端部、中央部、西端部に平坦面があり、全体として東から西へ下る傾斜地である。また、中央部と西端部の間には石垣が存在した。

調査の結果、東端部の平坦面は主に盛土によって、中央平坦面は主に削平によって造成されたものであることが判明した。20B北西壁の観察からは最大で2m以上岩盤を掘り込んで中央平坦面を造成していることが看取され、その付近では岩盤が露出している。削平の影響により、西半部ではほとんど遺構が見られないが、東半部の一部では縄文時代の遺物を含む包含層135SXが遺存する。

出土遺物は石器、土器、陶器で、石器には摺石・敲石類、剥片のほか、ほぼ完形の磨製石斧が1点ある。土器には繊維土器、楕円文の押型文土器が含まれる。陶器は山茶碗のほか、常滑窯の赤物が1点ある。また、地表面において山茶碗が複数点採集された。

ま と め 今年度の調査では住居遺構等を確認できなかったものの、一定量の山茶碗や、鉄滓・鞆羽口の出土からは中世において現地付近で鍛冶を行っていたことが推測できる。その遺構の位置は20A区より北の、国道257号南側の盛土下か国道下、あるいは国道を挟んだ北側などが想定されるが、既に滅失している可能性も十分に考えられる。(河嶋優輝)





20B 区拡大図 (S=1/250)



遺跡遠景 (南東から)



TT01完掘状況



20Ac区西壁面400NR部分



20B区磨製石斧出土状況